
異世界にて青年、魔法具を売る。

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にて青年、魔法具を売る。

【Nコード】

N2465BA

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

祖母から受け継いだオカルトショップ(?)を営む山名 透。客は少ないが割りと満足した経営ライフを送っていたのだが。突然の大きな揺れ。気付くと異世界にいた。

1話、山名 透、光る蠅。

授業が終わると同時に山名 透は教室をでる。

「トオルー、映画、見に行こうぜ」

「いやあ、今日、よーじあるし無理ー」

「最近人付き合いわるいぞー」

人付き合いの悪さを指摘する、友人、赤井に透はカラツと渴いた笑顔を向ける。

「多分、当分は付き合い悪いと思うよ」

透は学校の裏門から抜け出し。とある店に向かう。

オカルトショップ、と言うよりはアクセサリー店や骨董品店の印象を受ける陰鬱げな雰囲気のお店。

一本、道を隣に行くと大通りで多くの人が賑わっているのだが。その店が接する通りは静かで人は少なく裏通りに分類されるのが人目でわかった。

透は店の鍵を開け、シャッターを開き、掛札をひっくり返して、開店中と表示する。

学校の制服を脱ぎ。店の奥のクローゼットから黒いズボン、シャツと腰に巻くタイプのエプロンを取り出し、それを着る。

カウンターにある背もたれの無いパイプ椅子に座り、今日も客を待つ。

「今日はお客さん来るかなあ？」

机の上に突っ伏しながら、一人ごちる。

うん、美少女がいきなりバイトさせて下さいとか。無いです

かねえ。

そもそも店の名前が良くないのかな。看板取り替えるのとか金掛かりそうだし。面倒臭いですし……。

オカルトショップ「不幸な黒猫」は高校二年生、透が祖母、山名茜から受け継いだ店であった。

客は少ない。2、3週に1人、運が良ければ2人と言った具合で、普通なら経営も成り立たないような状態である。

祖母の遺言により大金を手にした透はあまりお金のことでは困っていないかった。どちらかと言えば客が来ない方が問題であった。

確かに人気の店みたいに行列になるのは勘弁ですけど、1日1人ぐらいの割合で来てくれたっていいのになあ

「暇だなあ」

透は携帯を取り出してゲームでも始めようとしていた。

チリンチリンとドアにつけておいた鈴が鳴る。

入ってきたのは20歳前後の若い女性。

「いらっしやいませ」

透は椅子から立ち上がり、軽く会釈する。

女性は店をゆっくりと何度も何度も回る。

どうしたんだろう。探し物かな。

そう思いながら透は声をかけない。

まあ、僕買い物の時は店員から声掛けられたくないタイプだから。

ただ、女性は何度も何度も狭い店の中を回るだけで、透も何か声かけないといけないかな？ と悩み始める。

こんなに店内に長くいる客は初めてだった。大体の客はフランクな感じで目当てのものが手に入れば、さっさと店を去る人が殆どだ

った。

困りました。接客とか勉強しとけばよかった。

「何か探しものですか？」

につこりとスマイルを作る透。堅い敬語を使わなかった。付け焼刃の敬語で恥をかくのは何のメリットもないと思ったためだ。

「え？ ああ、はい」

女性は驚いたようで、そこで少しもる

「いい感じの店だなあって思ってただけで、何か欲しいものがあつた訳じゃないんです」

「なるほど、うちはどうですか？」

「いい感じに落ち着く店だと思います」

「そうですか」

「はい」

女性が微笑み、透もそれに返して笑った。

その直後だった。店全体が大きく揺れた。縦横無尽に。

じ、地震！？

「きゃーー」

「大丈夫ですか！？」

女性はその場できがみ込み、透は反射的にその女性に覆いかぶさっていた。

時期に揺れが収まった。

店は特に大きな被害も受けず、少しアクセサリーが散らばった程度であった。

しかし、透には大きな異変が襲い掛かっていた。

何だ、これ？

透の視界には、無数に飛び散る光るハエのようなものが見えていた。

1話、山名 透、光る蠅。（後書き）

現在、書きだめ23話まであります。それが切れるまでは毎日、1話か2話、投稿しようと思います。

評価や感想は作者のモチベーションに直結しますので、その気があればどうぞ遠慮することなくしていただけると幸いです。

2話、宇佐美 笹、心地よい。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

揺れだろうか？

ジワリと恐怖と何かが私の気持ちを支配する。

私は偶然、見つけた店、オカルトショップ「不幸の黒猫」にいた。

正直、散々な就活の日々に嫌気が差していた。

もう、正直、ニートになってもいいかな？ っと思ってた。

もちろん、そう思ったからって、そう言う行動が出来る訳じゃないのが、現実。

どこか遠くに逃げ出してしまいたかった。

散々な日々に、鬱屈としていた。

そんな時だった、「不幸の黒猫」を見つけたのは。

何と言うか、店の名前に惹かれた。今の心情は、自分の悲劇に酔っているヒロインの心情に似ているのかもしれない。

店は物静かな感じでウロウロしていても店員さんはほって置いてくれる。

自分の自由みたいな物を仄かに感じた。

もちろん、日々不自由だと思っている訳じゃない。

ただ、この店ではそう言う自由とは別の自由を感じた、狭い自由と言つべきか。なんとも詩的な表現である。

店員さんは20歳ぐらいだろうか、ほっそりとしていて、何と云うか、線の細い系男子（？）って感じで、イケメンとまでは言わないが普通にかっこいい男の方だと思う。身長は随分、高そう。立ったら180センチぐらいはありそう。

店員さん、特にこちらに干渉してこようとする様子はない。いい店だと思った。

何かを買いに来た訳じゃない、何かを買うつもりも無かった。冷やかした。

何週も何週も狭い店の中を、回っていると、唐突に声を掛けられた。

さつきまで、ほっといて欲しいと思っていたのに悪い気はしなかった。店員さんの声も透き通る感じのいい声で心地よかった。

私が笑うと、店員さんも笑い返してくれた。何とも、うん、魔力というか魅力のある笑顔だと思う。儚い。

その時だった、店全体が揺れた、縦横無尽に、と表現するのが適切だと思う。

やたらに揺れた、ちょうどミキサーにいれられたら、こんな感じじゃないだろうか？

揺れたというより、半ば回ったといった方が正しいかも知れない。

私は叫んだ。

店員さんは私に覆いかぶさった、心地よいと思った、安心感があった。

不謹慎ながら私は大きな揺れに、恐怖しながら……少し「ワクワク

ク」していた。

そうだな、ちょうど、絶叫系のジェットコースターに乗るような気持ちに似ていると思う。

2話、宇佐美 笹、心地よい。（後書き）

1話1話が短いと感じる人がいるかも知れません。すみません。

1話のタイトルは「話、語り部、1つ単語」と言う形にしようと思います。

作者が side、誰 と言う表現法を使うことが苦手なためです。（読む分には全然気にならないのですが）

ので一話、一話タイトルをチェックしていただけると読みやすくなると思います。

誤字脱字の報告は気軽にしてください。見直してはいるのですが自分ではなかなか気付けないことが多いので。

3話、宇佐美 笹、痛い子。

「だ、大丈夫ですか？」

何と言うか、この店員さん、やっぱり線が細い。

「はい、その……大丈夫です」

「何じゃこりゃー!!」

外から大きな声が聞こえる。

古いネタだなあ、誰かが太陽に吠えている。

「どうしたんでしょうか？ 外で何かあったのでしょうか？」

私は店員さんに尋ねてみるが、店員さんは何故かほづけて、宙を見据えている。

「あの？」

「な、何ですか？」

私は少し驚く。ちよつとビクツとした。

「何か、光る蠅のようなものが見えませんか？」

「いえ、何も見えませんが？」

どうしたんだろうか？ 痛い子？

重度の厨二病？

「すいません、変な質問をしてしまって、ちよつと頭を打ってしま
いまして、変な感じがして」

「大丈夫ですか！？ その、私を庇って」

何か申し訳ない。さっき思ったことを取り消したい。

「いえ、大丈夫です、頭を上げたとき後ろの棚で打っただけです
から」

店員さんはカラカラ快活そうな渴いた笑いを作る。実が伴って
ない笑顔なのだが、安心する。

「また揺れが来ても困りますから、さつさと外に出ましょう」
「あつ、はい」

店員さんは立ち上がり店のドアを開こうとする。
ガチャガチャとドアノブを回すが開く様子がない。
シーン

「困りました、開く様子がありません」
「そうですね」

淡々と状況を告げる店員さんに、私は少し困る。

「少し建て付けが悪かったんですよ、このドア」

バツが悪そうに言い訳をする店員さん。少し好感がもてる。

「そうみたいです」

何故か店員さんはいつも笑顔だ、営業スマイルとはまた違うのだが、何と言つか可愛さとかを感じさせない笑顔。

「少し離れていてください」

「え？」

バンツ！！

「店員さんはドアを蹴破った！！」

「実況しなくてもいいですよ？」

「少し、驚きました」

本当はかなり驚いたのだが。

「そうですね？」

「なかなか、ワイルドな店員さんですね！」

「そうですね？ そうですね、お客さんは少し嬉しそうですね」

私は少し嬉しいのだろうか？

違う。

私は少し「ワクワク」しているのだから。

外にでた瞬間だった。

「今度は凄く驚きました」

私は啞然とした。ここまでとは。

「そうですねえ」

店員さんはいつも通りニコニコしている。驚きがあまり伝わってこない。

新手のポーカーフェイスと言う奴だろうか。

外に出ると、森が広がっていた。

瓦礫が転がり。苔むした地面のところどころに、アスファルトが浮き上がっている。

両隣にあった自転車屋は半壊、パン屋は木が貫いていた。

何より、一番驚いたのは、金髪の感じの悪い刺青をした、四十代ほどの男が、緑のシワシワとした肌を持つ小さな化け物……

ゴブリンのような化け物に襲われていることだった。

3話、宇佐美 笹、痛い子。（後書き）

この話は結構だらだらしている所があります。

基本、書き溜めが在るぶんは毎日22時から23時に投稿しようと思つのでよろしく願ひします。（作者の事情にもよりますが基本23時に投稿しようと思います）

明日は休日なので12時に一話、23時にもう一話投稿しようと思つてます。（上に書いた法則からされる場合は、このように前の話の後書きで出来るだけ明記するようにしたいと思つてます）

4話、山名 透、ズルズル。

「すみません、あれは何でしょうか？」

僕は少し自分の無知を恥じた。

あんな、緑のシワシワとした肌を持つ腰ぐらいの高さの人型の生き物、始めて見た。

少なくとも動物園や図鑑ではあんな生物、見たことがない。

「すみません、私も良くわからないのですが、おそらく『ゴブリン』と呼ばれるものじゃないでしょうか？」

お客さんの言葉で余計に、あの生物の正体がわからなくなった。

「すいません、芸能人とか疎くて。新手のアイドルとか、そういうのでしょうか？」

ゴブリン？

「その、少しひどいことを言いますが、私の目には随分、不細工な緑のシワシワに見えるんですか？」

お客さんは、こつちを見詰め少し可笑しそうに笑う。

「えーと、店員さんはゲームとか、やらないんですか？」

「はい、携帯ゲームをたしなむ程度で」

少し恥ずかしいな。後頭部をかく。

「インターネットとかも、あまりやらないので」

「とても、現代人とは思えません」

お客さんは絶滅危惧種でも見るような、驚愕の目でこちらを見る。

「その、どう説明したらいいのか」

お客さんは少し難しい顔をする。

「そのゴブリンって言うのは架空の生物で、人間を襲うモンスターに分類される生き物で……」

「ああ、ハリー・ポターで出てくる、屋敷しもべ妖精が凶暴化し

たようなものですか？」

「そうです！ ちょうど、そんな感じです！」

お客さんの中でじっくり表現だった様で結構満足している。

なんか、今の僕は人前な所為か気分が敬語的だと思う。

正直疲れる。

「あの店員さん、助けないんですか？」

お客さんに聞かれた。

「あ、僕の名前、山名 透っていいいます」

「トオル君ですか？ ヤマナさんですか？」

「どっちでもいいです」

「私は宇佐美 笹です」

お客さんも名乗ってくる。まあ、こっちが名乗ったので名乗り返したただけけど。

「じゃあ、ササさんは呼びにくいので、ウサミさんって呼びますね」

「はい、あつ、でも、さん付けじゃなくていいですよ？」

「失礼ですが何歳ですか？」

「失礼ですねえ、22歳です」

失礼と言いつつも、年齢を覚えてくれるウサミさん。ギャグキヤラなのか？

「僕は18歳なので、やはり、さん付けになりますね」

「うそ！ トオル君そんなに若いんですか？」

「そんなにつて言つても、四つしか変わりませんよ？」

あと、年下だったからだろう、僕の呼び方はトオル君に決定しようだ。

「あつ、死んじやいましたね、ヤクザっぽい人」

ウサミさん、人が死んだのに軽い。

「そうですね、まあ、棍棒で四方八方から殴られたらヘビー級ボクサーでも一分も持たないんじゃないでしょうか？」

ヤクザっぽい人がズルズルと引きずられて行く。

やっぱり、ゴブリンは人間と同じで雑食なのだろうか？
人間も食べるのだろうか？

「ゴブリンさん、ヤクザさんをお持ち帰りですかねえ？」

「テイク アウトですね！」

ゴブリンはズルズルとヤクザさんの死体を引っ張っていく。

「ウサミさん、少し楽しそうですね」

「不謹慎ですか？」

「そうじゃないでしょうか？」

暫定ヤクザのような人、略してヤクザっぽいとは、血痕を残して森の中に消えた。

4話、山名 透、ズルズル。（後書き）

基本、前書きは使わないようにしようと思ってます。

作者が携帯で小説を読むときに前書きが邪魔だなあって思ったりすることがあるからです。

あと、基本後書きは毎回書くことと思います。これも携帯で閲覧するときあったり無かったりすると「うーん」って思ったりするためです。

5話、宇佐美 笹、魔法。

「やっぱり、あの人、ゴブリンに食べられちゃったのかなあ？」

私は今更ながら怖くなってきた。

ただ、怖くなったが、「ワクワク」も増していた。

現在、私は「不幸な黒猫」の2階の生活空間にお邪魔さして、貰っている。

トオル君はとりあえず店の整理と少し周りを見回ってくると言うので、一旦ここを出て行った。

「異世界トリップ……ふふふ」

私は今おかれた状況を恐怖しながら堪能していた。

多分、私一人じゃあ、泣き崩れてゴブリンのエサになっていたと思う。

「それが今、僕達が置かれておる状況ですか？」

「と、トオル君！」

音もなく、後ろには家主が立っていた。

さっきまでは付けていなかった、モノクル……片眼鏡や腕輪をつけている。

「そろそろ、夜になります」

「あ、はい」

「と言うか、もう暗くなって来てます」

「そうですね」

「正直困りました、電気も水道もガスも駄目です」

「やはり、そうですか」

「異世界トリップと言うものについて説明して欲しいのですが」

うん、まあ、この子、ファンタジーとか疎いんだよ。

現代人とは思えないほど、うとい。

「異世界トリップって言うのは、言葉通り異世界に転送されたり、

何かが原因で偶然、異世界に迷い込むことを言います」

「タイムスリップみたいな物でしょうか？」

トオル君、何かズレてる。

「似ていますが、全然違います」

「はい」

「要するに、異世界トリップって言うのは、ファンタジーの世界に迷い込むことを言います」

トオル君は首をかしげる。

「本や漫画の世界に迷い込むってことですか？」

「さつきよりは近くなりました、とりあえずそういう感覚でいいです」

一々、根本から説明するのは骨が折れる。

せめて、ファンタジー系のゲームをやったことがあったら、説明は早いのだが。

「えーと、じゃあ、例えば理由と言うのはどういうことが理由になるのでしょうか？」

「作品にも寄りますけど、だいたい、テンプレ的には、どこかの国の王様に召還された、とか、神様やそれに準ずる存在に何らかの理由で異世界に行くように提案、または強制されるっていうのが、大体の流れです」

「成る程」

トオル君は考え込む。

「神様の方は置いておいて、何故、王様は異世界から人間を召還するのですか？」

「えーと、大体は召還される側の人間に勇者とか絶対的存在になる資質があつて、旅に出て魔王とか人間を敵対するものを、倒して欲しい、と言うのが理由です」

「うん、なるほど」

「異世界トリップの場合は大体、中世ヨーロッパぐらいの文化レベルをイメージしたいと思います」

「女王やら騎士やらですか？」

「そうですね、あまり科学が進歩していなくて、その代わりに魔法が発達していると言うのが相場ですね」

「ウサミさんの知識は凄いですね」

「あなたが何も知らない過ぎるだけです！」

「魔法って言うのは」

「あつ、魔法の説明は大丈夫です」

「はい」

「映画とかで見たことがありますし、それに……」

「そこでトオル君はそこで後ろポケットを探り出す。」

「それに？」

「指輪をはめる。」

「どうやら、僕、魔法が使えるようです」

そういつて彼は暗闇の中人差し指の上に小さな火を灯した。

5話、宇佐美 笹、魔法。（後書き）

テンポはどうでしょう？ 作者自身は遅い方だと思っんです。

テンポの速い作品なら5話で「ギルド」とか出てきたり初戦闘ぐ
らいは終わってると思っんです。

テンポの遅い作品ですが付き合っただけだと幸いです。

6話、山名 透、火柱。

「どうして魔法、使えるんですか!？」

ウサミさんは随分驚いている様に見える。

「どうも、この指輪の効果のようです」

金色の指輪をはずして見せる。

「私にも使えますか？」

ウサミさんの顔は喜色満面の笑みを浮かべる。

「やってみてますか？」

ウサミさんはガクガク頭を縦に振る。糸が切れた人形のようにだ。
少し愉快。

ウサミさんに指輪を渡す。

まるでプレゼントをもらった子供のようで可愛い。

「ど、どうやるんですか？」

ウサミさんは指輪と奮闘している、グヌヌ又って様子だ。

「えーと、指輪に熱を込めるイメージです」

少し違うのだが。そんな感じだ。

ゴオオオオオオ

火柱がたった。

勢い良く。

「きゃっ」

「大丈夫ですか!？」

ちよつと僕は大きな声を出ただけで駆け寄ることは無い。
暗くて危ないから。

「すいません」

「ああ、指輪だめになっちゃいましたね」

ちよつとガツカリ。

ウサミさんは指輪を見詰める。

「あの、どこも変わってないんですけど？」

「はい、でも光るハエが散ってしまったので」

「光るハエ？」

少し怪訝な顔をする。

「はい、どうやら僕は魔法を使える道具の周りに光るハエみたいな物が見えるみたいです」

「精霊とかマナってやつっすか!？」

ウサミさんは一転して興奮した声を出す。

「えっと、そうなんじゃないでしょうか？」

身を乗り出すウサミさん、身を引き、逸らす僕

「すいません、つい取り乱して」

「いえ、気にしませんよ」

うん。

そう言えば、ウサミさんは世に言う腐女子と言う奴なのだろうか？

「ウサミさん、ウサミさんは腐女子なんですか？」

「へ？」

「ウサミさんは腐女子なんですか？」

「そ、そうですね、何か文句でも！」

ウサミさんは若干、怒っている様な悲しんでる様な。

「へえ、腐女子の現物って初めてみました、ちよつと感動です」

「ほ、ほっ」

ウサミさんはどのタイミングで喜んで、どのタイミングで落ち込むのか良くわからない人だ。

「そう言えば、ウサミさん、ウサミさんはこれから、どっするんですか？」

僕は至極当然の質問をウサミさんに投げかけた。

「…………へ？」
ウサミさんは固まった。

6話、山名 透、火柱。（後書き）

今、弟のi podの「ゆけ！勇者」と言うゲームにはまっています。放置型RPGと言う特性を利用して、PSPで「勇者のくせになまいきだ」をプレイしながら、数分おきに弟のi podの勇者を見に行くうざい子をやらしてもらっています。

このゲームの自分のプレイになぞって小説を書くなんて結構、楽しいなあと思うたりしてます。

感想、評価、誤字脱字の報告などはどうぞお気軽ななく。

7話、宇佐美 笹、エゴ。

そう言えば、勝手に私はトオル君ずっと一緒にいるものだと思っ
ていた。

うん、トオル君が私を養ってくれるって決め付けてた。

いや、もしかしたら、トオル君、優しいから頼み込めば養ってく
れるかも。

「トオル君、い、いえ、トオル様、私を養って下さい！」

「いやです」

「ですよー」。

でも、私、トオル君に捨てられたら、路頭と言つか森？ を彷徨
うことになるし。

てか、こんなところで、彷徨ったら確実にゴブリンのエサだし。

ここは粘るしか……

「そこを何とか！」

スタイリッシュにここは、土下座に限る。

「とりあえず顔を上げてください」

はっ！！

そこで、働かない私に差し掛かる一筋の光明。

「働かざる者、食うべからず、です」

「ですよー」

終わった、私の人生終わった。

「そんな、人生終わったみたいない顔しないで下さい、別に今すぐに
出て行けって言うてる訳じゃないです」

「へ？」

「どっちにしろ、今ここを出て行くのは危険ですし」

「どういことですか？」

まあ、ゴブリンは危険だけど、そう言う意味じゃなさそうだ。

「えーと、どうやら異世界転送されたのは僕達だけじゃなくて、こ

の辺一帯だつて事はわかつてますよね？」

「うん」

「で、どうも、僕達のほかに大体30人ほどこの世界には、地球人がいるようです」

「ふむふむ」

「どうも、その中にあまり行儀の良くない様な人達がいるようです」と、言いますと？」

「どうも、数人の不良少年なんですが、どうも今はゴブリン狩りを楽しんでるようです」

「ゴブリン狩り！！ 危なくないんですか！？」

「どうも、ゴブリン自体はあまり強くないみたいです、そこら辺の棒でも拾つて闘えば、困まらない限り、正直ゴブリン相手に一騎当千も簡単みたいです」

「でも、ゴブリンと闘つてるんでしょ」

「いつ、矛先が人間に向くかわかったものじゃないです、遠目から見ても、暴走しているのが目に余ります、それに」

「それに？」

「どうも、女性を捕らえて、無理矢理、やっているようです」

「それって！……………」

「ここでは、彼らを咎める者はいません、彼らは強いですから」

「でも、トオル君なら！」

「あるいは、彼らに制裁を与えられるかもしれませんが、ただ、それはリスキーですし、どっちにしろ、僕は昼間、ヤクザさんを見殺しにしましたから……確かに同じ女性のウサミさんには、ほっておけない事かもしれませんが、でも、ひどい言い方ですが、僕には他人事です」

「あなたの行動原理は滅茶苦茶です、それなら、私も見殺しにすればいいのに！」

トオル君は目を閉じる。

怒っているのだろうか？ 私。

違うな怒っていない、憤ってるんだ。
ちようど、ネット小説の主人公のキャラがブレた時に感じる批判に似てる。

でも、違う、彼には彼なりの……。

「すいません、カツとなってます」

「いえ、ウサミさんが怒るのは当然です、こちらこそ、すみません」
頭を下げるトオル君を見て情けなくなる、自分の方が年上なのに。
「ウサミさん、僕は明日の明け方、ゴブリンの巣を探そうと思います」

「どうやって？」

「ヤクザさんの血痕を辿ります」

ヤクザさんは犠牲になったのだ……

「でも、何でゴブリンの巣なんて」

「さつき、働かざる者、食うべからずって言いましたが。現状、働かなくなつて時期に食事にあり付かなくなります。根拠はありませんが、おそらくゴブリンは雑食でしょう」

「……ゴブリンの巣から、蓄えを奪おうってこと？」

「ウサミさん……嫌ですか？」

「べ、別に、ゴ布林にそこまで愛着ないんだからね！」

「第二の目的として」

「私のツンデレはスルー！！」

「ツンデレ？ 何ですか、それ？」

「すいません、話を続けてください」

「第二の目的として、水源の確保があります。いくら、ファンタジーだからって生物ですし、水は必要だと思います」

「でも、トオル君、前世の知識をここで当てはめるのは、危険だと思います」

「まあ、そうですね、どっちにしろ探索途中に川でも見つけれたら、ラッキー程度にも思ってます」

「うん」

「それに、おそらくゴブリンが食べられるものなら、人間でも食べれるでしょう」

「? どういうこと?」

「例えば、今、店の目の前には赤いリンゴのような実のなった木がありますが、あれは食べられるのでしょうか?」

「毒ってこと?」

「そうです、お腹を下す程度ならいいですが、致死性の毒や蓄積すると危険な毒があったら、たまりません」

「大丈夫じゃないの? リンゴっぽいし」

「揚げ足取りますが、前世の知識をここで当てはめるのは、危険です、特に食は命に関わりますから」

「う、確かに」

「それに、上手いことゴブリンを捕らえることが出来たら」

「毒味にも使えるってこと」

「そうです」

「そちも、悪じゃのお」

「? はい、そうですね?」

駄目だ、この子、お約束が通じない。

「出発は明日か明後日の明るくなって来るぐらいがいいです」

不良連中が寝ている間について事か。

「目的は、ゴブリンの蓄えの強奪、毒味ゴブリンの捕獲、水源の確保。優先順位は言った順でいいですか?」

「トオル君は、なかなかエグイねえ」

「どうせ、人間が自分のエゴの為に他の生物を、しいたげるのはいつもの事ですよ」

7話、宇佐美 笹、エゴ。（後書き）

今回はなかなかまともなタイトルをつけたと自負してます。

明日は21時に投稿することになると思います。

誤字脱字の報告、評価、お気に入り等。お気軽に。

8話、山名 真理、祖母。

私、山名 真理の兄、山名 透は頭がおかしい。
昔から。

昔と言ってもいつからかは、わからない。

ただ、頭がおかしいと初めて思ったのは祖母の葬式の時だったと思う。

父も母も、表面上悲しんでいたが、内心喜んでいたんじゃないかと思う。

私も何故かほっとしたことを憶えてる。

私の父方の祖母、山名 茜は親戚から随分煙たがられていた。

理由は知らない。知りたいとも思ったことは無い。

兄は頭がおかしかった。

兄は随分、祖母に懐いていたと思う。

グランドマザコンとでも言うべきか、何か強そう。

葬式で兄だけが号泣していた。慟哭と言ってもいい。

兄だけが祖母の死体にすがり付いて泣いていた。

私の目には、祖母は随分自由人に見えた。

祖父とは離婚していて、気味の悪いアンティークショップを営んでいた。

兄は毎日、祖母の店に通っていた。

母に叱られても、父に殴られても、私がさげすんでも、やめなかった。

兄は家族の邪魔だった。家族の亀裂だった。

兄は随分、無欲な人間だったと思う。

誕生日もクリスマスも子供の日も、何も親には、せがまなかった。親も逆に手を焼いたと思う。

「お兄ちゃんはなんで、あんな人の店に毎日通うの？」

そう兄に聞いたことがある。

「マリも、バアちゃんが嫌いなんだねえ」

そう言っ、兄はカラカラ笑うだけで、私の質問に答えなかったのを憶えてる。

私は恥ずかしくなった。

言外に「お前は周りにつられてるだけだ」と言われた気がして。無償にムシャクシャして夜中、兄をボッコボコにした。やり返さない兄に、余計腹が立った。

家族の関係が最悪になったのは、祖母の遺言が見つかった時だった。

祖母の遺言には、店と財産は全て兄に譲ると記してあった。

そんな遺言が合計、15枚見つかった。

誰も祖母に金があるなんて思ってなかったから。余計に苛立ったのだと思う。

ゼロが7つに頭に8、八千万、子供に渡すには法外な額だと親戚が訴訟や裁判を起こし。家族も大変だった。

お金もまっとうに稼いだお金で何の問題も無かった。

私も兄が羨ましかった。こんな事なら少しでも祖母によくして置けばよかった、こんな事なら少しでも兄と仲良くして置けばよかった。

あの時、どうして、ああなったんだろう。そう思う。

全ては兄が悪い。

「3千万ここに、置いていきます、話し合いでも、裁判でも、殴り合いでもして、みんな仲良く分けて下さい。これ以上僕に関わらないで下さい」

兄以外の親戚全員が集まった会議だった。

そこにいきなり兄が現れて、紙袋を長机の上にドサツと置き、言い放った。

その瞬間だった、一致団結していた筈の親戚の間で乱闘が起こった。

「汚い」

兄はそう一言、笑いながら口にして、その場から消えた。

あれから数ヶ月。

あんな紙くずに何の価値があったのだろう、今になってそう思う。少なくとも乱闘するほどの価値は無いと思う。

唐突な揺れだった、予震も無かったと思う。

気付いたら森の中、緑のシワシワとした化け物、そう、ちょうどRPGにでてくるモンスター、ゴブリンかコボルトのような化け物に囲まれていた。

8話、山名 真理、祖母。（後書き）

どうでしょうか。唐突に新キャラです。

テンポが悪くなる原因ですね。

ただ、作者は無駄に伏線巻きまくりたいタイプの人間なんです。それを回収することをメンドクさがる、あまつさえ「もう伏線なんて回収しなくて良くない？」などと思ってしまつので、余計にタチが悪い。

感想などなど。よろしくお願いします。

9話、山名 透、血痕。

「すみません、寝過ごしてしまつて」

目の前でウサミさんは土下座している。

何と言つかプライドの低い人だ。

「大丈夫ですよ、どっちにしろ僕も疲れてましたし、ゴブリンの巢の探索は明日でもいいですから」

血痕が消えない限り、巢の位置がわからなくなる事はないし。

どっちにしろ、ゴブリンはあまり頭が良くなさそうですから、血痕の向きに直線に歩けば、簡単に巢に辿り着きそうですし。

「本当にすみません」

「いいですよ、気にしてませんから、あと、はい」

皿に乗せたパンと白桃を渡す。

「缶詰です」

「ありがとうございます」

「えーと、今後の方針について話しませんか？」

軽く話題を振ってみる。

「ぎくっ！」

「口で効果音を出さないで下さい」

「捨てないで下さい！ お願いします！！」

本日、二度目の土下座。

何と言つ価値の無い土下座。

「今のところ、捨てるつもりはありませんから」

「はい！ 私、一生トオル君の寄生虫になります！！」

「それは駄目です」

「ですよー」

なんというか、この流れ、お約束になりつつある。

「えーと、僕は正直、店さえ続けられれば正直、元の世界に帰れなくていいかな？ って思ってます」

「私も楽しさえ出来ればどっちでもいいです」

何と言つかウサミさんは二トの鑑だと思う。

「ですから、ゆくゆくは街や都市に出たいと思ってます」

「どこまでも付いて行きますぜ！ トオルの旦那！！」

「ウサミさん、もちろん付いて来るなら、働いては貰いますよ？」

「……お、おう！ 当たり前じゃないですか、旦那！」

まあ、妙な間があつたけど気にしない。

「それで、経営とかするに当たって他の人から死守したい、魔法具が二つあります」

「何それ！ ワケテカ！」

わくてかつて何でしょう？ まあ、どうでもいいですが。

「一つはこの片眼鏡」

「うん」

「この片眼鏡には、魔法具の効果を調べる効果がついてます、これはかなり重要です」

これが無いと、一々、魔法具を使って効果を調べなければならぬ。

「次に、1階に置いたままですが、黒い釜というか鍋のようなものです」

「どういう効果なん？」

「15日に1度ほど魔法具をランダムで生成する効果です」

かなりの便利品だ。究極的には片眼鏡を失っても、釜さえ残っていればなんとかなる。

「最重要アイテムですね」

ウサミさんは若干、驚いている。

「そうです、だから、この2つは死守したいと思います」

そう言いつつ、片眼鏡をはずす。割れたりしたら一大事ですし。

「あと、ウサミさんには渡しておくものあります」

「ごそごそ、ジャラ、ゴト。」

「な、何ですか、これ!？」

「何ですか、魔法具と銃です」

ウサミさんはかなり呆れている。

「魔法具はともかく、何で拳銃を持ってるんですか!？」

「昨日の夜のうちに回収しておきました、ヤクザさんの遺品です」

「何で私に……ハア」

おそらく、ウサミさんは今、気付いた。

「はい、そうです、不良少年の手に渡ると、暴走を助長することになるだけです。ウサミさんの護身用に使ってください」

「こっちの魔法具は？」

「手の平サイズの火の玉を投射する使い捨てタイプの魔法具です」
ウサミさん、うんと首を縦に振る。

「回数は3発程度で、使い切ると錆びて、崩れて、砂みたいになります」

「了解」

「そっちも護身用に使ってください」

「あいさー」

「あと、昼間は出来るだけ外に出ないようにして下さい」

「不良少年に拉致られるから？」

「そうです、もしそうなっても助けませんから」

「冷てーなあ、トオル君」

「そうですか……」

ガシャ、ガシャ、ガシャ。

シャッターを叩く音。

何か言葉を続けようと思ったのに。

「ウサミさん、念の為、奥のほうに隠れて下さい」

「えっ?」

「多分、不良の連中だと思います」

9話、山名 透、血痕。（後書き）

ある程度、一々説明しなくてもわかる察しのいい人物を書きたいです。

小説を書くのがラクにならうわっ何をするやめら

すみません茶番でした。

10話、下川 勉、パシリ。

何で俺が変なオカルトショップに駆り出されなくちゃ、いけねーんだよ。

アキラはこっちの世界に来て調子に乗り出した。

まだ、異世界に来て一日しか経てないのに、確実にこっちの世界では身分、ヒエラルキーが完成していた。

「ちくしょー、このまま下っ端とかありえねーし」

つーか、コジマも、カネムラも、イトオも、キジマも調子に乗ってる。

俺の方がゴ布林倒してるのに、俺に命令してきやがる。

上手い事へりくだってアキラに気に入られただけのクズども。

つーか、今、俺がパシられてる間にも、あいつら女とやってるに決まってる。まじ、羨ましい。

アキラは化け物だ。

笑いながらゴブリンの頭割って楽しんでやがる。

もともとはそうじゃなかった。

どっちかって言うと、俺らの中じゃおとなしい方で、ビビリとかイチビリとか言われてた奴だった。

こっちの世界に来てからだ、アイツは吹っ切れた、つつかぶっ壊れた。

ゴ布林を狩ること楽しんで、女捕まえてやりまくってる。
イカれてる。

感覚もイカれてる。まるで後ろに目があるみたいに。背後から襲ってくるゴ布林を叩き潰したり。かなりの距離があるゴ布林を

見つけて叩き潰しに行ったり。化け物みたいな感覚だ。

こっちに来てから、調子良いとか、俺は進化したとか言っただけはゴブリン叩き潰しまくって疲れきった後に女とやりまくってた。ゴブリン狩り、強姦、漫画喫茶の占拠。もろもろ、完全にイカれてる。

アキラには逆らわない方が良い。

ガシャ、ガシャ、ガシャ。

ムシャクシャしてシャッターを蹴りまくる。ざまあ。

「いんだろ！ 出て来いよ！！」

俺が叫ぶとガラガラとシャッターが開いて、結構身長の高い男が出てくる。

「何ですか？」

「食料よこせ」

ここで、相手には有無を言わさない。さっさと食料だせばいい。「何ですか？」

男はニコニコ笑って、質問してきやがる、まじうつとおしい。

「さっさと食料だせつつてんだ！」

怒鳴ってやる、さっさとしろっての。

しかし、男はさっきと変わらずニコニコしたままだ。

「キミ、名前はなんて言うの？」

「今、カンケーねえだろ！」

だんだんイライラしてきた。

「僕はシモカワ ツトムって言うんだあ
はあ！？

「それは、俺の名前だ！！」

「不良グループのリーダーのパシリで三下なんだあ」

男はニヤニヤと笑っている。

「フザケンな、てめえ！！」

「あははは、図星かあ」

男はニコニコ笑っている。
殺す。

「やめときなよ？」

「はあ！？」

「僕は君が後ろポケットからナイフを引き抜くより速く、キミを殺せるんだよ、ツトム君？」

「な、何でわかったんだよ！？」

男は笑顔のままだ。

不気味だ。

「ほら、食料」

不気味な男は扉の奥から袋を取り出す。

「な、缶詰！？」

「不服かい？」

「何で、俺の用件がわかった！！」

「え、どういうこと？」

「俺はあんたがここに降りて来てから、用件を言ったんだ！ 取りにも行かずに袋を出したって事はあらかじめ用意してたってことだろ！！ それにあんたは俺の名前を知ってた、どういうことだ！？」

いらいらする。

イライラするけど……、こいつは不気味だ。

「うーん、どうでもいいじゃないかな、そんなこと」

俺の名前を名乗った男はケラケラと笑う。本当にどうでも言いと言っ風に。

「な、何だよ！、何なんだよ、お前！！」

「僕が、誰とか、キミが何とか、キミがパシリとか、どうでもいいじゃないですか？」

男は笑う、何が楽しいのか、何が愉快なのか。

不気味以外の何でもない。

「っ、ちょ、調子に乗るな!!」

「不服に思ってるんでしょ、今の現状を」

男は笑う、ニヤニヤと、カラカラと。

ああ、そうか、アキラはアキラでやばいけど。こいつはこいつでヤバイ。

「何なんだよ、てめえは!」

自棄になって叫ぶ、俺は完全にコイツに飲まれてる。

「明後日……」

男は俺なんて眼中に無いように呟く。

「あ、は? あ、明後日?」

「そうだな、明後日がいい、適当な理由を付けて、また来て。不服なんでしょ? 協力してあげるから」

ガタンと男はドアを閉める。

「はっ、はは、ははははは」

俺は糸でも切れたような錯覚に陥り、数分、立ち上がれなかった。

10話、下川 勉、パシリ。（後書き）

右脳

「キャラが薄くなった奴から死ぬ。そんなメタな短編が書きたい…」

左脳

「右脳、あなた疲れてるのよ」

まったくどうでも良いですが作者は左利きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2465ba/>

異世界にて青年、魔法具を売る。

2012年1月14日23時15分発行